



## 発掘調査の概要

### 檜隈寺周辺の調査（飛鳥藤原第164次）

檜隈寺は、キトラ古墳から約600m北西の丘陵上に位置する寺院です。渡来系氏族の東漢氏の氏寺とされ、その寺跡には現在、東漢氏の祖先とされる阿知使主を祭神とする於美阿志神社が建っています。神社の境内には、今も7世紀後半に造営された講堂・金堂・西門の基壇の一部が残っており、塔跡には平安時代の十三重石塔が建っています。

今回の調査は、キトラ古墳周辺の国営歴史公園の整備にともなうものです。調査区は2カ所にわたり、8月24日に開始しており、調査面積は約750㎡です。

今回の調査区は、於美阿志神社境内にある講堂基壇の約50m北に位置します。本来ならば、僧房など寺院の重要な建物を想定できる場所ですが、柱穴列や基壇など明確な建物跡は検出されませんでした。調査区のある場所は、講堂基壇から2.5mほど低い位置にあることから、後世に大規模な削平をうけていることが考えられます。

ただ、瓦を利用した暗渠が1基、大規模な削平を免れて検出されました。調査区内には、丘陵部西側斜面にかけて北西方向の小さな谷が入り込んでおり、その谷頭部に暗渠を作り、谷底に向けて排水していたと考えられます。使用された瓦は、檜隈寺創建瓦で7世紀後半のものと考えられますが、谷の埋土から出土した遺物の年代は、それより後の10世紀前後のものも多く、暗渠が作られた時期を確定するには、さらなる検討が必要です。

また、調査区西側斜面では、奈良時代以降の大規模な整地を確認しました。奈良時代以降の檜隈寺は、平安時代の十三重石塔があるものの、不明な点が依然として多く残されているのが現状です。今回の調査でその一端を知る手がかりを得られればと期待しています。（都城発掘調査部 石田 由紀子）



瓦を利用した暗渠（北から）